

都道府県別賞一等

父が遺してくれたもの

岐阜県 下呂市立金山中学校 三学年

井戸 理人

「病気が分かった時はまさか自分かと思いましたが、保険に入っていたので安心しました。」というテレビCMをよく耳にする。昔の僕だったらそんなものは保険に入ってもらうための演出だと軽く受け流せたかもしれない。

しかし今の僕ら家族には身に染みて感じる言葉だ。

僕の父は、タバコも飲酒もしない、趣味は筋トレという健康そのものの人だった。そんな父の病気が分かったのは今から七年前のことだった。ただの腹痛かと思つて受診した結果ガンだった。その頃僕は小二、弟は年中でまだその事実には知らされなかった。後から聞いた話によると、父はガン保険に入っていなかったそうだ。まだ三十代。健康が自慢の父は、まさか自分がかかるなんてかなりのショックを受けていたという。ましてや治療にかかる費用への心配、自分がいつまで生きられるのかという不安など様々なことが一気にのしかかり本当に大変だったそうだ。治療にかかる費用以外にも遠方の病院への通院費、休職中の減給など実際に病気にならないと分からない苦労もたくさんあったという。それでもまだ小さい僕たちに心配させてはいけないという思いから、なんとかして治療を受けていたそうだ。

病と闘いながらの父、父の看病をしながら働く母は、僕たちを毎年夏に旅行へ連れて行ってくれた。今考えると父は運転することもかなり辛かったはずなのに海へ行ったり、ダムへ散歩に行ったり色々な所で様々な体験をさせてくれた。その一つ一つが今でも僕の父との貴重な楽しい思い出だ。

そんな父も三年半の闘病の末、亡くなった。僕は日に日にやせていく父を見ながら子供ながらに死への恐怖を初めて感じた。優しくもあり厳しくもあった父という存在がいなくなることに、これから僕達は生活していけるのだろうかという不安、小学五年生の僕にはとても考えられることではなかった。

僕は今回保険について学ぶ上で母から初めて聞かされることがあった。幸い父は死亡保険には加入しており、そのおかげで僕たちは今まで通り生活をしていくことができている。母は、今回の父のことがきっかけで自分の生命保険を見直し、ガン保険に加入したという。そして僕たちも同じように加入しておいたと言っていた。僕も家族も父のことがなかったら生命保険について考えようと思わなかったかもしれない。しかしこれをきっかけに生命保険という生きていく上の「お守り」の大切さを知ることができた。「まだ健康だから。今は子

第60回中学生作文コンクール

供だから。」それでも人間いつどこで何が起きるか予測することはできない。

母はもう一つ僕たち兄弟が将来困らないように父が遺してくれた生命保険があるかと教えてくれた。この先僕が夢に向かって進んでいくのにも多くの資金は必要だ。その話を聞いてこれは父からのプレゼントなんだなと思った。

生命保険は自分のお守りであると同時に家族への思いやりでもあると思う。僕が今こうして普通に生活することができているのも父のおかげであるからだ。起きるかどうかわからない。"もしもの時"のためにお金を払うことはためらうことかもしれないが、"自分の大切な家族"のためには生命保険は本当に必需品である。

僕も将来家族を持って誰かの親になるかもしれない。その時は、父が僕に遺してくれた"お守り"のように家族が困難に直面しても困らないよう備えておきたいと思う。